

静かに自習せよ



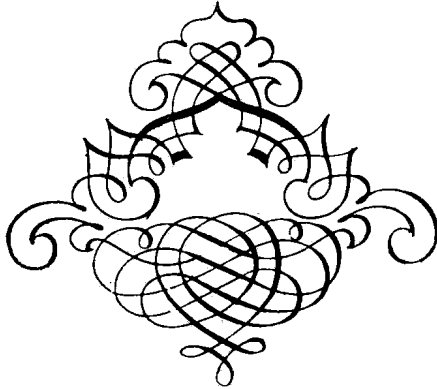
高谷玲子



静かに
自習せよ

著者紹介

23才の時、乳ガンを患い手術。
昭和39年ガンが再発し、昭和40年2月15日肺
臓ガンで死亡。
「静かに自習せよ」は中学3年の12月より20才
の10月にかけて少しずつ書き上げたもので著
者の処女作である。



静かに自習せよ

定価 600 円

昭和 46 年 11 月 20 日 印刷
昭和 46 年 11 月 30 日 発行

著 者

高 谷 玲 子



発行所

株式 秋元書房
会社

東京都新宿区赤城下町42番地 〒 162
電話 268・0758 (代表)
振替東京 27047

乱丁・落丁のものは、本社またはお買いもとの書店にてお取りかえします

組版 西田整版・印刷 皆川印刷・製本 徳住製本
© 1971 Printed in Japan



静かに自習せよ



高谷玲子



静かに
自習せよ

原书空白



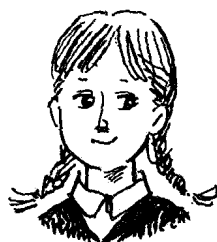
静
か
に
自
習
せ
よ



花村千太郎―不良の親分と自分でも、またク拉斯の者も思いこんでいるが、あんがい純情。花千といわれている。



白石雅也―皮肉屋で意地悪。席は私のすぐうしろ。秀才で委員長のくせに、エスケープ組のピカ一である。



私―本名、相川マリコ。通称坊や、時に金魚。おさっしの通り、チビで頭の働きは子供っぽい。二年C組副委員長。



老シャモ先生とエチケツトお婆あさん―マリ子の祖父母。有閑荘と称する家に住んでいる。こわいがやさしい。



三木律子―スピーカーの申し子ともいわれるほどの口達者。口喧嘩では男性軍もたじたじ。女史と呼ばれる。



市倉―口さえきかなければ、初対面の者は、ガリ勉組の秀才とまちがえてしまうほどだが、実は低空飛行の鈍才。

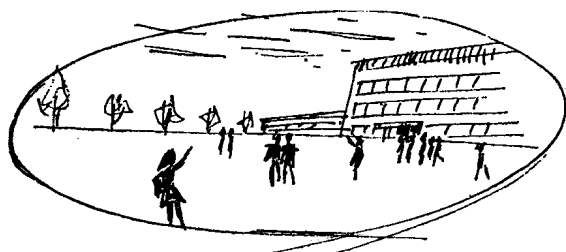
目次

一	わがクラスの面々	九
二	二人だけの月	二四
三	パパは野良犬	五〇
四	珍中の珍事	六九
五	プレゼントはもらいどく	七六
六	老シャモ先生のお年玉	九七
七	きらいな人は大きい	一二〇
八	何とおせっかいな彼	一二三
九	ああ、か弱き私	一二四
十	静かにすべし	一二六



十一 大人になりかけ
.....二六

さしえ・みつはしちかこ



一 わがクラスの面々

「雪の明日は裸虫の洗濯」だそうだが、昨日はみぞれまでばらつくほど寒かったのに、今日の暖かさは裸虫ならずとも私だって洗濯をしてもいいような気がするほどである。おまけに私の席は窓際にあるのだから、ポカポカと気持ちの良いこと、まさにストーブ不要である。

これで五時間目が始まる前に職員室から呼び出しさえなければ、今日という日は大安吉日であると、私は鉛筆をけずりながらの舟漕ぎを楽しんでいた。が、

「うちの委員長どうかしていない？ 寛大過ぎるわよ」

「そら、ミルトンも言ったでしょう。『彼等が自由と呼ぶは放縦のことだ』うちの委員長のために言われたようなものだと思うわ」

この傍若無人きわまる言葉に、たちまち太平の夢は破られ、舟は静止し、鉛筆をけずる手は止まった。

「寛大もいいけど『過ぎたるはおよばざるがごとし』というでしょう。うちの委員長のは完全に放縦よ。また、ウェブスターも言ってるよ。『自由は健全なる制限に比例して存在する』ってね。制限のない自由なんて『自由』という神聖な言葉に対するぼうとくだし、また自由そのものをおのずから否定することになるわ」



この最後の声明は三木律子らしい。一瞬驚きに全機能を硬直させた私も、また始まったな、とおかしくなったが、顔を上げない。

うちのクラスを大別すると、エスケープ組とガリボソ組の二組に分かれていて、中立派がほんの少数いるにはいるが、少数党だからあってもなきがごとき存在である。この三木女史をリーダーとするガリボソ組は、皆驚くほどいろいろな言葉を知っていて、「いざ鎌倉」という時はいつでもそれを矛^{はさ}とし、そして盾^{たて}ともする。

前の時間、理科の先生がお休みで、その時間宿題の答合わせをすることになり、そんな時、きちようめんな先生は宿題忘却者の名簿提出を委員長に命じたが、クラスの四分の一はかの不名誉なる名簿に名を連ねる資格があったにもかかわらず、わが委員長は名簿を作製しなかったのみならず、彼等不名誉クラス員達に黒板に書かれた答えを写し取るように命じ、すましてそれを理科の先生の上に置いて来た。ということがそもそもこのガリボソ組の点取虫共にボソボソと不平をぼつ発させる原因を作ってしまったのである。

ほんのささいな、たとえ蚊の涙ほどの不平であっても見逃せないのが、彼等ガリ勉連中の特質である。とはいえ本当にうるさい点取虫連中である。こうした不正行為やエスケープの悪いことくらい誰だって知っている。しかし、それを一々てきぱちしたり、密告したりしていたのではかえってことは重大になる恐れがある。さしあたり国家の情勢にかかわりなさそうだから、黙殺していた方がよい。恐らく委員長もこんな考えでかまえているのであろう。だが、ガリボソ組にはそんなゆうちようなのは一人もいない。実にえらい剣幕で声は一段と高くなる。

「委員長が放縦なら副委員長は何のためにあるの？ 副委員長は何をしているの」

副委員長とは、まさしくこの私のことである。だが、別に彼等は私に返答を要求しているのではない。彼等はよくこんなふうにして、他の人に誰かのことをたずねたり、そのあげく返事までしてくれる。

「とにかくうちの委員長といい副委員長といい、実にルーズな放縱主義者でエスケープを奨励していると見られても仕方がないわ」

「まったくこれからの行く末が案じられるわ。北見將軍が知ったら、どんな顔をするか」

おことわりしておこう。北見將軍といっても軍人でもなければ征夷大將軍でもない。隣のクラスの委員長、正確には北見哲夫君の別名である。

「彼等のごときを『クラスのタイハイへの誘導者』というのよ」

「とにかくね、何事も度を越してはいけないわ。悪い人達ではないけど、程度を知らないからね。知らず知らずにクラスを破壊の門へと導いてしまうのね、『悪意なき破壊者』とでもいうところね」

「クラスタイハイへの誘導者」「悪意なき破壊者」これらの言葉の中に私がふくまれてさえいなかったならば、実に感心できるのだが……。

私の席は後から二番目、その後が委員長である。いまや委員長への非難ごうごうとして、その不平はクライマックスに達している。聞いている委員長の心境やいかに？ そっとふり向くと、当の委員長閣下、くすぐったいとも、おかしいとも、何とも形容のつかぬ不思議な表情で日誌をつけている。委員長という名の職業も楽ではないな、と私は気の毒になった。とやかく言われても、私には委員長というかぐれみのあるからまだいい。何かことがあると一番風当たりが強いのは委員長である。今の場合がまさにその一例である。が、まだまだこんなのは序の口である。いわば、何といっても、言うだけだからおだやかである。が、中には——もちろん男生徒だが——委員長と意見が合わないで、実力行使に出てくる連中もいる。エスケープはエスケープでも私や委員長より一段とひどいエスケープ組で校内グレン隊にも加盟している。

それから二日後の始業前、私は席についてはいるものの、どうにも落ちつかなかった。ベストエスケープ組の連中、花村千太郎を頭とするこの一隊はいつでもクラスの面よごしなことばかりしている。まったく、三木女史の言い草ではないが「クラスのガン」である。エスケープをするだけなら私も委員長も同様ではあるが、彼等は自分たちの気に入らない事があるとなちまち乱暴を働く、流行歌を教室内で平気でどなる。上衣のボタンをはずして、帽子をわざと横にまげ、あみだにかぶり、ズボンのポケットに両手をつっこみ、肩をゆすって学校じゅうを横行カッポする。生徒会やホームルーム会の決定事項を破ることを誇りにしている。その上どこいねいにも「花千」こと、花村千太郎を始め、三名ほど柔道部では黒帯をしめているから、委員長をはじめ、誰も手をだせないで泣き寝入りする。まさか幾ら委員長でも——いかに頼りない彼でも——全然手が出せないわけでもあるまいが、いったいどんな対策をその胸中に秘めて泰然自若をかまえて彼等の行動を黙視しているのであらう。ときどき本当に委員長にも手が出せないのではないかと疑わざるを得ないような時もないではない。

ところで花千達は、いつでも決して人に誉められることはしないのだが、今朝はひどい、ストープのまわりでふざけている。取っ組み合いをしている、馬飛びをしている。さすがの私ものんきにかまえていられなくなった。ああ、こんな時すら、委員長は彼等を黙認しているのであらうか。ガリボソ組の非難がまた始まったらしく、向う側の方から三木律子らのカン高い声が、きれぎれに私の耳に入ってきた。

その時ついで私の横を通り抜けたものがある。エスケープ委員長だ。委員長はどんどん前へ行く。教室の中はしんとした。そして委員長は私や他の人々のけげんなまなざしなど一切おかまいなく、花千一隊のそばまで行った。おやと思つて見つめる私は、

「やめたまえ」

といつになくリンとした声を聞いた。

「う？」

とふり向いた花千達は声の主が、ほかならぬくだんの委員長とわかると、

「何だ？」

と肩をそびやかして食ってかかる。まったく困った「ガン」である。

「やめたまえ」

おや？ 今日の委員長の声も態度も常になくリンとしていて委員長の威厳をいかにそなえている。その上静かだから、隣の北見將軍よりなおおかしがたい。

「オイ白石だまってるよ」

花千は親分のメンツにかけて底気味の悪い声でおどす。その言外には、これ以上ツベコベ言うとは許さんぞ、という意味が含まれている。

「やめたまえ」

委員長は三度同じことを言い放った。委員長の横顔が、この時ほどきれいに見えたことはかつてない。キッと花千達に注がれた視線にはばんじゃくの重みがある。委員長がこれほどしっかりした男の子であったとは……見なおす必要がありそうだ。委員長長の一いつにない態度に一度はろうばいしたもの、すぐに兎は兎であったことに気づいた花千親分は、

「だまれ！」

と一カットした。だが、どういう風の吹き回しでか、今日の委員長には全然きき目がなない。

「花千、ベルはもう鳴ったんだ。席へつけ！」

委員長の命令である。しかも私が知る限りにおいて初めての。花千は驚いたらしく一瞬あせんとしたが、即刻対策案を提出した。

「なぐちちまえ」

これが花千一隊の森羅万象^{しんらかんしやう}もろもろに対する解決案である。

「ああっ……」

私は両手をかたくにぎりしめて凝視した。花千は委員長に飛びかかったが、委員長が、す早く、まったくす早く飛び退いたので、彼の身長一メートル七十、体重六十五キロの満身をこめて作ったゲンコツはもろにストーブのエントツをなぐりつけてしまった。

あつ、ストーブが倒れてしまった、学校が火事になる。さすが活発なガリボン組もビタリと口を閉じたままである。委員長は？ 彼はいつものように、ゆうぜんたる足取りで教室のすみから水の入っているバケツを両手に下げてきてストーブにかけている。花千は？ 彼は、もうもうたる灰かぐらの中で、あのありあまる巨体をあっちへうろろ、こっちへうろろ小ネズミのように動き回っているだけである。ストーブの火は委員長のとっさの機転と沈着な行動によって消えた。

やがて、受持ちの先生が、誰かの報告により、変事を知ったらしく、顔色を変えて入ってきたが、横倒しになったストーブともうもうたる煙幕とビショビショの床を見て、ほっとしたらしく、大きく息を吐いたが、やおら気を取り直して、

「誰だ、ストーブを倒したのは？」